満州からの帰国のこと

匿名希望（当時、満州在住、10 歳前後の話）

昭和 17 年 4 月

大連市常盤国民学校入学　きれいな街並みはアカシアの樹々に囲まれていた。防空演習もした。

昭和 19 年 3 月

父の転勤により吉林市（中国東北部）へ。ここの会社は吉林人造石油（株）といい、国策会社。そこの社員クラブに勤めた。

吉林市江北国民学校に転入。そこでは、生徒たちは校庭のスケートリンクで滑っていた。マイナス 20 度。初夏には何も考えず、野山を駆けまわっていた。山の谷間にはスズランが一面に咲いていて、手いっぱいに摘んだ、懐かしい思い出があります。

昭和 20 年 8 月

15 日、大人達が頭をたれて、ラジオの前に居る姿が・・・。

すぐにソ連兵が侵攻。昼夜となく押し入ってきて、「ダワイ、ダワイ」（※～しろ、～急げ、～よこせなどいろいろな意味）と、手当たり次第略奪していった。母達女の人は頭を丸坊主にして、男の服装をし、天井や床下や防空壕などに隠れ、昼間は頭に手ぬぐいなどを被ってカモフラージュ。

その内、中国内の内戦があり、八路軍（共産党）と国民党（台湾へ）が撃ち合い、日本人家族は家の中に身をひそめる日もあった。そんな中でもロスケ（※当時の日本語におけるロシア人またはロシアに対する蔑称）はやってきて略奪した。そんな時、八路軍の将校が追っかけて取り返してくれたこともあった。

昭和 21 年 7 月

やっと何度目かの引揚通達が来て、親は子供のリックを手縫いし、食物を夜通しで作り、馬車で河を渡り（松花江の支流）吉林駅に集結。そこで無蓋車につめ込まれて、新京（現長春）へ。ここで 1 か月余り収容所生活（元日本たばこ会社の広い広い倉庫だった。）親達の大変な苦労は我々子どもには判らず、ウロウロしていたのを、同じ引揚げのどこかの教師だった方々が、収容所内の子どもを集めて、歌などを教えてくださった。

昭和 21 年 8 月の終わりころ

やっと動きがあり、また貨物列車で錦州へ。ここでまた足止め。1 週間収容所暮らし。弟一人は弱って動かず。葫蘆島（コロ島）の港に着き、頭から白い粉を全身にふりかけられ船内へ（DDT だったらしい)。

昭和 21 年 9 月初め

どのくらいの航路だったか？　日本の港に着岸、博多港だった。着岸後、検疫のため上陸が延びた。やっと下船。引揚列車に乗り、ぎゅうぎゅう詰めの車中、広島を通過した時はピカドンがどんなものかと。はるか向こうまで何もなかった。加古川駅におり損ねるところを、窓から子供や荷を車中の皆さんが出してくれ、やっと誰もいないホームに降りた。乗り換えにいつ来るかわからない汽車を待つ間、見知らぬ女の人がブドウをくださった。あまりにもみすぼらしい家族にびっくりしたのだろうか？　こんな季節に生っているのか、と有難くいただいた。今でもその時の親切が忘れられない。

昭和 21 年秋

5 年生の二学期に小学校に転入した。もう国民学校ではなかった。

昭和 17 年～21 年の子供時代の出来事でした。5 人の子どもを守って日本にたどり着いた両親の苦労はどんなだったか！　親のありがたさが、大人になって判り申し訳ない想いです。